



No. 2728
2016年12月25日
発行責任者 大沼 元
編集責任者 武田 昌仙

超低額回答に怒りと落胆

赤字の補てんもできない一時金

地方本部は貨物会社の16年度年末手当の支払いで、基準内賃金の1・5ヶ月分という超低額回答に対し、再回答を求める抗議行動等を宮城・福島両県で開催した。

再回答を求め抗議行動

本部闘争指示第42号を受け、仙台地本は11月22日、貨物東北支社に対し、東北協議会として「再回答」を求める申し入れを行った。申し入れを行った地本原

子書記長は、席上貨物組合員の切実な生活実態や低賃金ゆえに希望が持てず職場を去る若者が続いている職場環境を述べ、その改善のために低額回答を撤回し再検討、再回答を要請した。要請に対応した貨物東北支社副支社長は「要請の内容は本社に伝える」と回答することにどまった。

また地本は仙地指示第12号により抗議行動の展開を指示。福島県は、郡山総合車両センター門前のスペースで、宮城県は宮城野貨物駅前において、それぞれ抗議集会を開催した。

福島県集会概況

※以下、「郡工情報571号11月30日付発行」を参考にしています。

11月22日、総合車両セン

再回答を求め抗議行動

ター正門前の駐車場で、郡工支部と福島県支部が合同の抗議集会を開催した。集会は福島県支部橋本執行委員の司会で始まり、同支部木藤副委員長のあいさつで開会。

主催者を代表し、地本原子書記長は、「15年度決算が計画を14億円上回っており、1・5ヶ月の回答には怒りを覚える。25日まで再回答を求める運動をしていく」と述べた。また貨物東北支社への申し入れの際、「新入社員が集まらない」ことに触れ、「企業体質が疑われているのではないかと指摘したことを明らかにした。さらに「貨物では若手社員が特に不満を持っており、年間3ヶ月の手当では生活費の補てんにもならない。再回答を求める運動の先頭に立つ」とあいさつした。

社員の犠牲性に対し「重い指摘」と会社

貨物福島分会橋本書記長からは、「17年ベアゼロ、

- 10・17 第一回地方執行委員会
- 10・19 貨物経協・提案・交渉
- 10・22 アスベスト対策委員会、安プロ・業長会議
- 11・9 第二回地方執行委員会
- 11・12 第21回東日本マラソン大会
- 11・16 各地方委員長・書記長会議 冬期団交
- 11・20 国労東北定期総会・東北労働講座
- 11・22 貨物年末手当抗議集会（宮城・福島）
- 11・26・27 第4回国労フクシマ交流・視察学習会
- 11・28 本社経協

- 12・3 地本家族会総会
- 12・4 東北貨物協議会総会
- 12・5 第三回地方執行委員会・支部代表者会議
- 12・6 全国代表者会議
- 12・13 地本運輸協議会定期委員会
- 12・14 第一回春闘事務局会議
- 12・17 安プロ・業長会議
- 12・22 調査部長会議・ダイヤ改正提案・合対会議
- 12・23 地本組織部長会議
- 12・24 地本アスベスト対策会議

手当年額3ヶ月はJR内で最低。会社は、『賃金削減による社員犠牲の政策を続けるのか』という国労の指摘に対し、『重い指摘である』と認めており、黒字になっても何ら変わりがないのであれば、ストで闘うことも正当でないか。貨物では将来不安から若年退職が増加している。再回答を求め仲間とともに頑張る」と決意表明がされた。

13回の要請書送付

郡工支部貨物分会天野書記長からは、年末手当の満額回答を求める分会の活動として、「現場長への要請行動と支社長・社長に要請書を13回FAXで送付し、回答後は再回答を求める要請を行った。今年の一時的な年末手当に及ばない」等この間の取組みを報告と貨物労働者の現状が報告された。連帯のあいさつとして、郡工支部車体科分会藤崎書記長、同装置科分会本田書記長、福島県支部村田書記長からそれぞれ貨物労働者とともに闘う決意が述べ

震災から止まった時間

原発事故がもたらしたもの

国労本部の主催による「国労フクシマ交流・視察学習会」が、11月26日〜27日の日程で開催された。四回目となる被災地での視察学習会には、北海道から九州まで全国の組合員ら42人が参加。視察内容としては、①除染済土壌等の保管状況 ②常磐線（富岡駅〜浪江駅間）除染・復旧工事の現状視察 ③避難指示解除区域・居住制限および帰還困難区域の現状視察である。

福島駅集合後、一行はバスで新地駅へ。しかし12月10日の運転再開に向けた工事が急ピッチで進められており近付かず、町役場から見学することに。町を上げられた。

その後集合発言を採択し、最後に郡工支部橋本委員長の団結頑張ろうで拳を突き上げ、客貨一体で闘うことを全体で確認した。

工事中の新地駅を新地町役場から見学



また浪江町は、1マイクログシーベルトを超える程度であったが、浪江から富岡に向かう途中の6号線では、モニタリングポストの表示は3マイクログシーベルトを超えておりバス内の線量計は異常を示す警報音で溢れかえった。

二日目の午前中には、視察参加者による学習会が持たれ、初めに水戸地方本部泉執行委員より、「常磐線復旧をはじめとした現状と課題」が報告され、続いて水戸地本福島支部の猪狩書記長からは、「被災後の支部運動と学習」報告があった。

また午後からの交流学習現地集会は郡山市内ホテルプリシードで行われ、水戸地本福島支部や仙台地本福島県支部の組合員ら総勢180人が会場に足を運び、原発の現状や放射能汚染の問題など環境や人的被害に至るまで多岐にわたる課題について学び合った。【原】

東北三地本が学習と交流

国労東北協議会は、11月20日～21日、盛岡市において、第13回国労東北労働講座を開催した。

組合員ら約50人が参加し、一日目は、労働講座の受講、組織拡大にむけた職場活動報告などが行われた。続いて第31回国労東北協議会定期総会が行われ、向こう一年間の活動方針を決定した。

また同時並行で平成採用組合員の交流会も実施され、東北労働講座の当初の目的でもあった、「若手活動家の育成」への一歩を踏み出した形だ。

二日目は、国労本部長が委員長が問題提起を行い、東日本本部佐藤書記長は、東日本本部の取組みと課題について報告し、その後全

体討論を行った。

全体討論の発言など

▼一建。月百時間を超える超勤、三週間一日も休日なし。夜間作業時休憩時間なし。実態調査取組む。

▼珪砂問題。落ち葉空転で大量に使用。交渉報告を。

▼TSSの秋田、仙台、盛岡統合後の問題点交渉を。

▼貨物の闘い。年末手当超低額回答。平均40数万円。

▼ストは犯罪でなく当たり前の権利、オルグの実施を。

▼仙台駅みどりの窓口、東北でも数本の指に入る職場が委託。労基署見解は実習は問題ないが、実売は不都合。出向ならばと逆出向がされている。プロパー今年で5人が辞めた。現在委託は停止しているが、交渉経過を。

▼駅の防犯カメラ設置、しかし業務ミスの場合、会社は巻き戻しで見ている。監視カメラでないか。

▼組織拡大が喫緊の課題ではあるが、労働強化改善の取組み強化が組織強化につながる。

▼盛岡・仙台・秋田の女性組合員の交流会を横手近辺でお願いしたい。

▼組織対策費。東日本で組織部長会議で希望があるといるが、基本はスト基金。議論内容は。



平成採用者の交流も行われた。進行は東日本佐藤書記長

▼労組法では出向社員もストに入れる。窓口交渉もわかるが、正式な交渉を。

▼TSSの手当。1・5カ月、エルダー3万円、フアー

ストリーダー3万、サブ2万。ジェスの手当金額は。

(仙台)

▼先日の組織対策会議では、

退職のお知らせ

9月30日付

後藤 郁雄さん
(仙総運転)

新田 順一さん
(JRバス盛岡)

10月31日付

藤原 康さん
(仙建工業)

影山 正さん
(郡山駅連)

赤間 敏幸さん
(仙台電車区)

大子田 清喜さん
(小牛田運輸区)

11月30日付

大内 広真さん
(Jテック)

浅野 直幸さん
(小牛田運輸区)

菅野 信一さん
(Jテック)

9の発言中7つの発言で継続要請があった。(盛岡)

▼本場の敵は政府 国交省。老朽設備、線路使用料、根本問題が未解決。国労はストを構え闘うこと。

▼支社の委託受け皿が溢れ、新たな委託先を作るとして

いるが現実困難。関連会社連絡会議を開催予定。

▼JR30年を問う安全キヤラバン。地方の意見を聞き丁寧な対応を求める(秋田)

退職のお知らせ

仙総車体
(テクノロジー)

後村 俊雄さん
(東工所)

千葉 覚さん
(仙石線駅連)

伊倉 伊美夫さん
(郡山設備)

佐藤 敬志さん
(小牛田駅連)

菅原 滋さん
(仙総車体)

渡邊 二郎
(小牛田保線区)

エルダー退職

9月30日付

大石 正昭さん
(福島地区)

鈴木 清美さん
(会津若松地区)

11月30日付

赤間 邦夫さん
(仙台駅連)

(契約社員)

今年も楽しく走りました!

キャプテン、高橋大病から復活

11月12日、皇居外周を利用した第21回国労東北日本本部駅伝大会が開催された。当日は素晴らしい天候に恵まれ、各地方の代表チームは爽やかな汗を流した。

仙台地本からは昨年に引き続き仙総支部チームと山形県支部を中心とした2チームがエントリーしたが、それぞれがチームが事情を抱えていた。

仙総支部チームは不動の大エースでキャプテンの高橋真人が欠場。理由は胸椎化膿性脊椎炎による長期入院だ。手術後の懸命なリハビリにより松葉杖を使いながらも職場復帰を果たし現在に至ったと聞く。

「ようやく人並みの足(太さ)になったのが嬉しい」と語る高橋の穏やかな顔の裏側にどれ程の労苦があったのかはわからない。だが、「手術後は、地に足を付けても足を付けた感覚が全くなく愕然とした。寝たきりで、すねと太ももは骨の太さまで落ちた。」と語り、先が見えない不安と焦燥感に襲われたと明かされた時、それらを打ち消し立ち向かう、想像を絶する努力があったのだと思っ

た。「病气から回復していく

経過がたまたまなく嬉しい。リハビリを担当している方から素晴らしい前向きな生き方、物事の考え方を学んだ。自分もそのように生きたい」と、ひたすら前を向いている。

今日も走ることはできないが、チームを鼓舞すべく盛岡から駆け付けた。

一方、山形チームの第一走者の予定であった武田昌仙は、ひざの痛みを耐えて会場にたどり着いた。

なんと武田は6月に痛風発作を発症。それ以降、服薬により尿酸値は落ち着いていたはずなのだが、5日前に痛風の2回目の発作を引き起こし、まだ片足を引かずついていたのだ。駅伝に備え懸命に準備してきただけに、落胆は大きかった。

第一走者を宮城県支部の若手、門間純平に託し、応援に回ることにした。

昨年より若干少ない14チームの第一走者が午後13時10分一斉にスタート。

仙総チームはキャプテン高橋の分も頑張ろうと直前のトレーニングで気合が入りすぎたのか、無理が祟りケガ人が多く精彩を欠き、結果は昨年の3位から大きく後退した9位。

だが正々堂々闘った結果



再会の喜びに溢れる駅伝チーム。右端が高橋